
魔法少女リリカルなのは ~転生者によるIFな物語~

黒い鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは（～転生者によるエフな物語～）

【NNコード】

N4580N

【作者名】

黒い鳥

【あらすじ】

【魔法少女リリカルなのは（～転生者による狂い物語～）】のエフの世界での話……だつたが、何やら前作の世界と繋がっている様子。そしてそんな世界に転生した原作非介入派である少女の前に現れた、最高の魔導師。

その二人の話。

一話 彼女は転生者（前書き）

何となく思いついたので投稿しました。
たんに思いつき小説なため、超不定期更新になります。
ある意味、続編ですね。

一話 彼女は転生者

腰まで届くであらう焦げ茶色の髪を持つ少女、浮鳴遙うきなみるかは転生者である。

よくあるテンプレな方法で死に、テンプレに能力を貰い、テンプレにリリカルな世界に転生してきた元高校生の少女。現在は小学三年生。

「はあ……」

一つに纏められたボーティルが溜息と共に揺れる。

前世と同じ容姿で生まれ、前世と同じ両親から生まれたが、生まれた世界は前世とは違う。

リリカルでマジカルな世界なのだ。

そりやあ、テレビの向こう側で見ている分には楽しめたが、実の世界となると話が変わつてくる。

もしかしたらあっさりと死んでしまうかもしれない世界なのだ。

実のところ、彼女の隣の席の生徒は、主人公高町なのはである。全転生者が欲したであろう席を、彼女は手に入れたのである。しかし彼女からすればまったく嬉しくないこと。

原作非介入派である彼女からして見れば、あまりにも嫌な席である。

ちらり、と高町なのはを見る。

すると目が合い、笑顔を向けてきた。

一応、ちらりも笑顔を向ける。

内心、恐怖しながら。

そもそも遙は高町なのはと言つ存在に怯えているのだ。

何故、あれほどまでに裏無く人間に優しい心で接する事ができるのか。

人間、人を救おうとする気持ちがある場合、絶対に自身の利益を考えるものだ。

しかし彼女は九歳の癖して自身の利益など考えることなく、助けを求めてきた少年のために、友達となる少女のために、世界のために動いたのだ。

「…………」

そんな美しか存在しないような少女を、遙は人間とは思えないのだ。九歳児と言う純粹なお年頃だから？ 嘘だ。九歳児ならもつと我侷を言っている時期だ。

「……はあ」

他人のために自己犠牲をする。

それは衛富士郎と同じようなものだ。しかも才能がある分、なお性質が悪い。

「まあ、私が関わらないといひでマジカルしてね」

息しか吐いていないようなほどの中量で呟いた。

屋上で一人、弁当を食べていたところ。

別に友達が居ないと云つわけではなく、食事のときは静かに食べたいのだ。

だが、その静寂な時間に 独りの少年が現れた。

「やつほー。転生者」

翡翠色の髪と眠たげな真紅の半眼を持つ少年が、彼女の前に訪れたのだ。

一話 彼女は転生者（後書き）

主人公は浮鳴遙さん。

十話も無いと思います。多分。

一話 彼は魔導師

さて、遙の容姿を語つてみよう。
まず原作主人公達に劣らないほどの美少女である。前世ではかなりモテたが、本人は興味なかつたので『年齢』=『彼氏居ない歴』に彼女は当てはまる。

もつとも『恋愛感情など一時の気の迷いによる精神的な病の一種に過ぎない』と言うモットーを掲げる彼女なのだから、彼氏が出来た
――なんて喜んでいる友人を見て思わず苦笑してしまうほどだ。

次に、髪。

焦げ茶色の、腰まで届く綺麗な髪をポニーテイルに纏めている。
次に、瞳。

大きく理知的な真紅の瞳である。

そんな彼女の前に

「…………」

真紅の瞳を持つ少年が現れた。

顔立ちは整っている方。イケメンとまではいかないが、カッコいい部類に入る顔である。

しかし、思わず目についてしまうのは、その瞳。
自分と同じ真紅の瞳だ。

その瞳からは卑しい感情や見下したようなモノは感じられず、ただ観察しているかのような目である。

「…………」

しかも、彼女の事を転生者と言つてきたのだ。
つまり彼は転生者の部類に入るのであろう。それはわかる。
だが、こいつ言った唐突な接触に、彼女はどうすれば良いのか頭を悩
ませていた。

「……それで、貴方は何者かしら？」

転生者と呼んできた以上、誤魔化しは効かないであろう。
多分、彼は転生者などを知る事ができる能力持ちだ。
そう推察したと同時に、彼に質問した。

「オレ？ オレはお前の隣のクラスのかなたゆくえ彼方行方かれがたゆくえだが」

試すような笑みを浮べながら、あっさりと名前を明かしてきた少年
彼方行方。

「私も自己紹介したほうが良いかしら？」

「どちらでも」

すでに知られている。

「浮鳴遙よ。よろしくね」「ああ。よろしく」

余裕そうな聲音。
余裕そうな表情。
接觸してきた意図は?
何故こんな時間に?

そう言つた事を冷静に考えていく。

あまり得意ではない魔法。その部類に入る並列思考を全力で使い、相手に気づかれない短い時間で考える。

「ふむ。別にそこまで考える必要は無いぜ」

「……何が？」

「不得意なマルチタスクを使って今まで考えなくて良い、って意味だよ」

「」

一瞬、世界が止まった。

そう錯覚してしまったほどの驚愕を彼女は感じた。

絶句なんて生易しいものではない。多分、脳味噌の動きが止まつたのである。

そう考えてしまつほどの言葉であった。

「……ん？」

ふと、行方が疑問を感じたような声を出した。
そして納得したかのような聲音で、

「ああ。能力無効化系能力者か」

「まあね」

彼女のスキルによつて能力を無力化した。

その瞬間、彼は確認をしてきた。

つまり今まで知る事ができていたが、能力を無力化された瞬間に知る事ができなくなつた。

それだけわかれば、すぐに理解できた。

「もしかして、彼方君の能力って解析系?」

「そうだぜ。よくわかつたな」

「…………」

不信感が高まる。

能力を封じられたのに、余裕そうな表情と声音は変わらない。
だから、質問を変えてみた。

「……魔法の方にも自身があるの?」

「そうだな。能力も強力なものだが、魔法も原作の主人公達以上だ

ぜ」

「……どのくらい?」
スペルマスター

「他称、最高の魔導師」

はつきし言おう。

彼女のスキルの無効化スキルでは、魔法までは封じられない。
故に、魔法の強度を聞いてみた。そして、後悔した。

「それで、用件は?」

「ああ。用件は」

「……空間移動?」
テレポート

行方がそう言つたと同時に、結界を展開した。
苦々しい表情をしたと同時に、遙は 消えた。

結界を閉じ、溜息を吐いた。

「……誤解されたか。抹消されると思われたか?」

周りと隔離するために展開した結界により、逆に警戒されたか。

そつ行方は考え、

「ま、どりでも良いか」

そつ言つて彼は教室へと戻つていつた。

「思わず逃げてきちゃつたけど……もつ少し居た方が良かつたかし
「ら」

軽率な行動だつたか、そう考えたが……相手の手札が分からぬ以上、逃げてきてよかつたのかもしない。こちらはまだ内容 相手の目的を聞いていない状態で逃げてきたのだ。

なら、良い感情は抱かれないのであろうが、だからと言つて敵として見られないはずだ。

そつ考え、新しい手札を作ることにした。

「午後からの授業は適当に参加するしかないか……」

何氣に小学校生活を楽しく送つてゐる彼女からして見れば、この出会いは面倒臭いことであつた。

一話 彼は魔導師（後書き）

一話一話が短い？まあ、それは見逃してください。

二話 転生者は疲労する

行方と出会ってから三ヶ月。

あれから彼方行方は何もしてこなかつた。直接的にも間接的にも。普通に隣のクラスなので見かけるし、すれ違つたりするが、完全に他人面である。

もしかしてあんな時間、本当は無かつたのでは？ と考えてしまつほどだつた。

用意しておいた切り札が無駄になつた感じだ。

しかし、彼が接触してきたおかげで自分がことん魔法に対し弱いと言つことを教えられた。

我流であるが、少しそっち方面に鍛えてみよつか？ そう考えることが出来たことには感謝する。

「ま、あの時、逃げたのは失敗だつたみたいだけど……」

転生者を排除するのが彼の目的だつた場合、すでに遙は殺されているはずなのだ。

普通な生活を送つてゐる遙には隙が多く、いつでも殺せたはずだ。

だが、行方は先程言つたとおり何もしてこない。

つまり、行方には暴力的な目的があつたわけではないのだ。

普通に用件を聞けばよかつたかしら？ と少し後悔する。

「……よく考えれば、彼以外にも転生者はこの学校に居る可能性があるのよね」

一度調べた方が良いな、と思い新たな手札を作ることにした。

「……ふむ

一方、行方の方はと云ひ、遙以上の悩みの種が出来てしまい、悩んでいた。

彼の悩みの種となるものはもちろん、転生者である。

その転生者は一ヶ月ほど前に地球に現れた。

それだけなら別に脳を使うほどでもなかつた。単なる転生者程度なら、何が起こるかと解決できるからである。それだけの手札を彼は持つてゐるからである。

逆に言つと、持つていない手札の範囲で起きたことは非常に弱いのだが。

事実、遙を見つけたときには彼は一年ほどかけて彼女に對しての手札を作り、そして接觸したのだ。

あまりにも酷い反則技さにびくすすれば良いのか、と言ひ思考をしていたのだ。

「あ～あ。また酷い反則野郎チートが出てきちゃつたよ」

自室のイスに座り、背もたれに寄つかかりながら溜息を吐く。

原作開始まであと一年と少し。

遙と同じく原作非介入派である彼は、彼女と接觸して同盟を組もうとしたのだが……用件を伝える前に逃げられてしまつた。

その放課後に出会った転生者やら、一ヶ月ほど前に現れた転生者やらで彼女と接触する時間がなくなってしまったのだ。いや、しつこく接するのもどうかと思い、時間を置いた、と言つ点もあるのだが。

しつこく接すれば、ストーカー扱いされるかも知れないし。
そんな適当なことを考えた後に作業に戻る。

「さてと……依頼されたものぐらにはしつかりと造らなくちゃな」

今、彼が作っているのは一ヶ月ほど前に現れた転生者に頼まれた物品名は、『零時迷子』。

本来の『零時迷子』は“存在の力”と言うものを毎晩午前零時にその宿主が消耗した“存在の力”を元に戻し回復させる一種の永久機関である。

しかしこの行方作の『零時迷子』は違い、“存在の力”的に魔力を回復させる物である。

宿主の魔力情報を解析し、毎晩午前零時に『零時迷子』から同じ波長の魔力を增幅させる、と言う仕組みである。

「まったく……何をやつてんだか。オレは」

原作に介入しないと決めときながら、原作以外で起ころる事柄に対しては首を突っ込む。

原作でなければ安全？ んなわけない。

結局のところ、彼はお人よしでもない。

ただ単に流れやすい人間なのである。

情に流されるのならまだ良いが、その場で流れてしまつ。

そんな自分に溜息を吐いた後、作業に戻つた。

「まあ原作には絶対に介入しないけどな」

行方が幼い頃にこちらに転移してきたときに養子に向かい入れてくれた男性のことを考える。

彼のためにも迷惑になるような行動は控えよつと考えたのだ。

それでも転生者と関わってしまうのは、転生者だからかもしれないが。

「……ふああ。眠い。寝よ

作業を中断し、ベッドに身体を預ける。

子供の身体であれば疲労が溜まり、眠らずにはいられない。

平行世界の彼とは違い、まだ人間らしい日常を彼は送っていた。

翌日。

腕輪型のデバイスを身に付けながら学校に登校した。

「まったく……放課後も他の世界に行つて素材集めしに行かなくちゃいけないぜ」

『お疲れ様です。マスター』

右腕に付けた彼のデバイス、ドラウプニル 略称ニールが行方をろう。

デバイスを持ち歩いている理由は簡単で、ただ単に話し相手が欲しかったからである。

かなりの人間不信者である彼はと言つて、信用できる人間が少ないため、話し相手が少ないのだ。

ありとあらゆるモノを分析できる彼の瞳スキル構成解析コットドノウズにより、相手の思考や感情なども読めてしまう。この能力により、相手の能力や魔力の動きなども見ることが出来る。故に、遙が魔法を苦手としていた事を見抜いたのだ。魔力の動きが鈍かつたから、苦手だと理解できたのだ。

「あ、行方先輩。おはようございます」

「ん？」

後ろから挨拶されたので振り向く。
そこには

「ああ。お前か」

三ヶ月前に彼の前に現れた転生者が居た。

「なんか、お前に先輩だ何て言われるの……奇妙な感じなんだが」「いやいや、あっちの世界でも僕は貴方より後に転生してきましたし」

クックク、と特徴的な笑い方をする転生者を見つめ溜息を吐く。

「もつとも、あっちの世界とは少し性格が変わつていふだけだけどな」

「まあ、色々あつたんですよ。色々」

今日も遙は屋上の隅で一人、弁当を突いていた。

最近、隣の某悪魔さんが一緒に食べない？と誘つてきているが、

「私、独りで食べる方が好きなの。ごめんなさいね」

と言つて諦めてもらつてしているのだ。

内心、どこの厨一病だよおおおおおおーー……とか叫びながら屋上に向かつている。

それが彼女の日常であつた。

そんな彼女の日常に、また影が差した。

「やつほー。転生者さん」

ついに来たか、と思い顔を上げると　そこには、彼方ではなく少女が立つていた。

どこか皮肉を感じさせないシニカルな笑みを浮べている、長い銀髪に翡翠の瞳を持つ美少女。

背からして一年生だと思われる。

「…………

予想外な自体が発生した。

そんなふうに頭が混乱している中、彼女は自己紹介を始めた。

「初めてまして、僕は

「

二話 転生者は疲労する（後書き）

姿や見た目、口調も多少変わってしまいましたが、彼女が登場しました！

……え？ 誰だつて？ まあ一人称でわかるんでは無いでしょうか？

それではこの辺で。

現在までに出てきた転生者：四人

四話 彼方より来た転生者

「僕は、キール・ローレライって名前なんだ。よろしく、浮鳴先輩」

リアル僕つ娘が現れた。

「…………」

いや、そんなことはどうでも良い。

単に個性的な少女が目の前に現れただけだ。

問題なのは、個性ではない。^{ボクチコ}問題なのは、目の前に現れた転生者である。

明らかに転生者であろう彼女は……あれ？ もしかして男の子？
え？ もしかして髪が長く、さらには容姿が美少女な少年だつたりする？

下の服装を見てみると、スカートの下にズボンが見える。
スペツツ代わりとも言えなくも無いが、彼ノ彼女の一人称を聞く限り、男物のパンツを隠すためのズボンとしか思えない。
いや、だつたら何故スカートを穿くんだ？

「…………」

何てかなり失礼なことを考へてゐる遙であつたが、キールの方はただ苦笑するだけである。

「やれやれ、前世から男子か女子か、何て困惑させることがよくあつたが、せつかくの美少女姿になにに困惑している表情を見ると、

さすがに僕でも少し傷付くよ

「あ、ごめんなさい」

思考放棄。

素直に謝り、今度こそ（多分）彼女への対策を考える。

転生者 それだけでも脳を働かせなくてはいけない存在だ。

敵味方関係なく、転生者と言つ存在自体がイレギュラーであるから考えなくてはいけない。

しかしキールの方はと言つと、その真剣な表情を浮かばせている遙を見て、

「別に警戒する事はないよ。行方先輩もそうだけど、僕達の役目はもう終わっている。だから、僕達は原作に関する全ての事象について警戒しないでくれ」

「……どう言う意味かしら？」

「そのままの意味だよ。原作介入を狙い他の転生者を抹消しようとする愚かな転生者達とは違う、と言つ意味だよ。だから君に害意を

「える気も無いし、悪影響を「える訳でもない」

「……」
「……」
「……」

事実口異
ライアーカット

ここで、キールが発言した内容がどれだけ真実かどうかを見抜くために彼女は能力^{スキル}を使った。内容は、虚偽の部分だけ頭から無くす、と言つ能力である。

「……」

そしてスキルの結果 全てが眞実である事がわかった。
故に、彼女は怪訝な表情をさせた。

『行方先輩もそうだけど、僕達の役目はもう終わっている』

「……出番つて、どういつ意味かしら？ まだ原作は始まつていないのに」

「簡単な話だよ。僕達は…………」

唐突に言葉を止めてしまったキールに対し、またもや怪訝な表情をしてしまう。

キールの方も、驚いた表情をしながら喉に手を当てている。

「……ふむ。悪いが言えないみたいだ」

「そう」

スキルで確かめているため、言葉に偽りが無い事を知る事ができた。

「それで、貴方達の目的は？」

「何。簡単な話さ」

クッククック、と喉を鳴らすような笑いをした後、

「同盟を組みたいのさ。現在は僕と行方先輩だけだけど」

「…………同盟？」

「何の同盟かしら？ そもそも、同盟なんて組む必要なんであるのかしら？」

「まず、転生者に関しての情報が得られる

「「」みんなさい。私、転生者とかにも興味ないの。平和に暮らせれば」

そう、転生者とか何だと最近は彼女の周りが忙しいが、結局のところ、彼女は平和に暮らしたいのだ。だから原作に関わるつもりも無いし、転生者にも関わるつもりも無い。

「そう? だけど、その平和を手に入れんには A, S を乗り越えなくちゃいけないよ?」

「…… A, S」

「そう。蒐集が行われる時期だ」

「何で私に関係あるのかしら? 自慢じゃないけど、私はBランクも魔力値が無いわ」

「確かに、自慢じゃないね」

クッククク、と喉を鳴らすような笑いをする。
皮肉や嘲笑、見下しの類では無いことはスキルを使わなくてもわかる。

「違うよ。正直言つて、転生者からしてみれば、ウォルケンリッターなんて田じやないよ。警戒すべき存在は、僕達と同じ転生者だ」

「A, S で転生者達が暴走するの?」

「ああ? そこまでは言わないよ」

「……」

詐欺師と話している感覚に陥る。
ビームまでが本当で、ビームまでが嘘か。

「え?」

いつの間にか、ライアーカット事実口異が使えなくなつていた。

何故？ どうして？

そつ思考を巡らせるが、答えは出でこない。

「貴方、何をしたの？」

「ちょっとした能力で君の能力を封じたのさ」

「…………」

能力を無効化する能力を発動してみるが、現状は変わらない。何が起こっているか理解できない。

「それで、同盟に入るのかい？」

「…………その同盟の目的は何なのかしら？」

「簡単だよ。原作介入を求めるない転生者同士で助け合ひ同盟だよ」

「…………本当にそれだけかしら？」

「…………」

ただ笑みを浮べるだけでキールは何も言わなかつた。

「…………却下するわ」

「そうかい。それじゃ行方先輩にも伝えておくよ」

「ええ。お願ひね」

そう言つてキールは去つていつた。

「…………戯言ね」

弁当箱を片付け、教室へ戻つていつた。

そして一年後の無印で、同盟を組んでおかなかつた事に後悔する事になる。

「はあ……はあ……」

偶々手に入れてしまつたジュエルシードが、こんなことになるとほ……。

そう思い、溜息を吐きやうになる。
だからと言つて状況は変わらない。

「あら？ もうくばつたの？」

突如、田の前に紫色交じりの銀髪の少女が現れた。
へばつた……それは当たり前だ。

「何よこの異空間……さうと解除しなさいよー！」

夜の街道が永遠と続いている。

その終わらぬ道を、遙はずつと彷徨つていたのだ。
目の前の少女によつて作られた異空間の中を。

「『じめんなさいね。だけど、これも必要な事なの』

優しい笑みを浮べながら、赤い瞳を鈍く光らせた。

遙を異空間に閉じた相手は笑いながら、自身のウサ耳をピヨピヨ
こと動かした。

四話 彼方より来た転生者（後書き）

作者です。活動報告にも書きましたが、何故自分のところには感想が来ないのだろうか？ そう悩み続けている毎日です。

レベルが低いのか？ それとも面倒臭いのか？

色々と悩ましながら毎日を過ごしています。前作でもこんな話をしました一日ぐらしは来たりしましたが、すぐに感想が来なくなりました。

良い部分とか悪い部分とか、指摘すら来ないので何にもわからなくて……。

主観的と客観的の違いですね。

何故来ないのだろう……。

作者が何か悪いのだろうか……。

……マイナス思考ですみません。
ネガティブ

それではこの辺で。

五話 彼女の原作直前

この一年間、平和な日々が続いた。

魔導師だと転生者だと、そんな単語が出てきそうにない日々を送った。

だけど、それでも我流であるが魔法を鍛えてみている。

自身が魔法に対しても弱すぎる、と言うことを彼女は自覚している。故に少しでも対策を作れるよう鍛えてみているのだが……そこまで成果は無かった。

もっとも、CランクからBランクには上がったが。

「……んつ！」

腕を天に向かって伸ばし、背を伸ばす。

背中からパキパキと心地の良い音が鳴る。

朝から寝相を悪くして寝ていたことにより背中の状態に奇妙な感覚を感じていたのだ。

九歳で背骨が悪くなる、とか絶望的なことにはならないよう寝る前に気をつけようと誓つたのだ。

そんなことを誓つてゐるうちに、チラホラと一年生が見えてきた。初々しく、少しソワソワしている。

「今年は何組になるのかしらねえ」

今日は私立聖祥大学付属小学校の入学式である。つまり遙の小学三年生生活の始まりの日もある。

彼女が原作の舞台である聖祥に入学した理由は単純で、大学まで続いているからである。

この海鳴市には大学が聖祥以外存在せず、かなり遠いところにある。故に、エスカレーター式の学校に入学してしまったのだ。学力は必要だが。

「ええっと……うん。またなのはちゃん達と同じクラスか」

三年間同じクラスである主人公の名前を見つけ、溜息を吐く。依然、転生者である彼方行方は同じクラスにならない。アチラで何か細工しているとしか思えない。

自身もそう言った能力があればよかつた、と悔いながらも自身の教室へ向かう。

席は名前順なので、相島結城君あいじま ゆうきと中端黒兎君なかばし くろとにはさまれる事になる。隣の席の子が月村である時点で、彼女は諦めていた。

そして ホームルーム HR の時間。

いつもなら自己紹介の時間なのだが、今日は少し違った。

「みなさん。今日は新しいお友達の紹介しますね」

その担任の言葉に浮鳴はギョッとした。

原作開始直前で 転入生が現れるなんて、転生者としか考えられなかつた。

そして遙の予想は的中。

銀髪銀目^{シルバーヘア・シルバーアイ}のイケメンな少年が入ってきた。おかしなことに、まだ小学三年生と言う幼い年頃なのに、イケメンと言つ造形がすでに完成している。

そんな少年が微笑んだ瞬間

「初めまして。今日転入してきた中島貴樹です。よろしく

なかじまたかき

クラス中の女子が頬を紅潮させた。

『一コポ』『撫でボ』

恋愛系洗脳能力。

微笑んでも相手の頭を撫でても異性から高い好意を得られる、と言う能力。

これが効かないのは、すでに異性に好意を抱いている者か、もしくは転生者か。

転生者である遙には通じず、彼女は少し引いていた。
男子勢の幾割が嫉妬の対象として見ていた。多分、好きであった少女が頬を紅潮させたことに気づいたのだ。

「やつてらんねー」

思わず口を悪くしてまで呟いてしまった。

昼休み。

いつも昼食の時に使っている屋上は中島と女子達で占領されてしまつてるので、遙は珍しく中庭で食事する事にした。
何故、彼女が中庭にあまり行かないと言うと……

「……ん？ 珍しいな。お前が来るなんて」

「もしかしたら初めてなんじゃない？ 彼女が来るのは」

彼方行方とキール・ローレライが居るからだ。

キールの噂は聞いており、外国人だが日本語ペラペラ。しかも社交的な性格でクラスの中心のようだ。先生からも優等生と認められている彼女だが、よく一年上の彼方行方とよく話している姿を見かけるとか。それも中庭でよく昼食を一緒に取っている姿を見かけているとか。

人気はあるが、そこに恋愛が絡んでくることは無いらしい。遙は計算しながらの振る舞いなのでは？ と考えているが、まあ恋愛発展にならないような振る舞い以外は彼女自身の性格が起因しているのであろう、と結論付けていた。

閑話休題。

「一緒に良いかしら？」
「構わないが」

一人に近寄り、彼女は座つて弁当を広げた。

「今日、中島貴樹つて転生者が現れたんだけど、貴方達は把握していました？」

「…………」「

その言葉に、少し驚いたような表情をした。
しかし一人とも種類の違う驚き方をしている。
行方の方は中島貴樹と言つ名前に。キールの方は転生者と言つ言葉に。

「彼、『ニコボ』や『撫でボ』を持っていたけど……」

「え？ それは本当かい？」

「ああ。 それは知っていた」

二人の反応は先程から違い、キールの方は知らず、行方の方は知っていたようだ。

そのことに遙は違和感を感じた。

「……先輩。 もしかしてすでに中島と接触していたのかい？」

「まあね。 ちょっとした不可侵条約を張つたんだが……まさか転入していくとは思わなかつた」

ライアーカツト
事実口異を使用しながら話を聞いているので、彼等が嘘を吐いていないことがわかる。

「だけど、彼は『ニコボ』と『撫でボ』なんて持つていただろうか」

「いや、 は持つていなかつた。 の不安要素が関係しているんだと思ひ」

「なるほどね」

ところどころ、彼等の会話が聞こえなかつた部分があつた。声が小さかつたとかそんなものではなく、何かによつて知覚することを遮られたと感じであつた。

遙にはこの現象に身に覚えがあり、前回のキールも彼女の前では話せなかつた内容があつた。それと同じだわうと結論付け、質問しなかつた。

「……どうやら貴方達、彼のことをよく知つてゐるようね」

「まあね。 からの付き合いだし」

「もつとも、 もそじまでの付き合いは無かつたがな」

聞こえない部分があつたりと、 奇妙な感覚に陥る。

「……一つだけ質問」

「ん？」

「彼は貴方達の同盟に……」

「いや、 入っていない。 思いつきり原作介入する気だしな」

「そう」

それで会話を終了させた。

昼休みも後半に入ったので、 さつわと弁当の中身を片付ける事にした。

五話 彼女の原作直前（後書き）

今回登場した転生者：五人

六話 彼の原作直前……彼女の能力（前書き）

暴力的な戦いはあまりないだろうけど、能力同士の戦いはありそうになつてきました。暴力はいけないもんねっ！

六話 彼の原作直前……彼女の能力

翡翠の髪を持つ少年、行方は考える。

昼間に転生者の一人である遙に聞いた、中島貴樹が転入してきたことに関するだ。

中島貴樹に関してはすでに確認済みで、彼の能力も把握している。

名前：中島貴樹

魔力：SSS

能力：『五属制御』^{ハレメンタルハンド}『ニコボ』『撫でボ』

『炎』^{メンタルハンド}『電』『氷』『プラス』『水』と『風』の変換資質を持つ能力五属制御。

さらには恋愛系洗脳能力であるニコボや撫でボ。

そして魔力値SSSにイケメンと言つ、ある意味テンプレな少年。知りたくも無いが、彼については結構行方は知っていた。

かなりの下種野郎であることを。

「…………」

そんな彼に行方は、原作主人公達を売ったのだ。^{なのは}

自分は介入するつもりは無いから、彼女をどうにしても別に構わない、と。

つまり、中島を下種だとしたら、行方は外道なのだ。

これが物語であつたら、凄いアンチが来そうだな、などと行方は適当なことを考えたり。

「ふむ。だが……さすがに予想外だつたな」

中島が転入する事をまったく考えていなかつた。
いや、考えられなくもなかつたはずなのだが……それは無いかな、
と無意識のうちに思考停止してしまつていたのだ。

「ま、気にすることは無いか」

予想できなかつた　だからなんだ？

百戦錬磨の最高の魔導師スペルマスターが、力だけの肩に負けるわけがない。高慢しづらうとではなく傲慢おほまんでもなく、単なる実体験。

例え最強の魔導師が百人現れようと、彼は勝てる自身がある。
そしてそれだけの魔力・技術・経験・能力を保持している。

別に予想する意味が無い事を悔いても意味が無い。
だからあつさりと考へる事を変える。やはり考へる内容は、浮鳴遙
に關して。

『マスター』

「ん？ 何だ。ニル

唐突に彼のデバイスが話しかけてきた。

『遙さんの能力は何なのでしょうか？』

「……あれ。言つていなかつたっけ？」

『はい』

自身のデバイスに言つていなかつたことに違和感を覚えながら、彼
女の能力を説明する。

「浮鳴の能力は スキルを作るスキルだ」

『スキルを作るスキル……それはつまり、神様のような能力では?』
「まあ、才能を作る能力とも言えるしな。名付けるなら、『想造力』スキルメイカーか?』

想つただけで力を創造する能力、スキルメイカー想造力。

「アイツの能力はそれこそ反則級だ。だからアイツの能力値ステータスの中で魔法系数値がかなり低かったんだよ」

浮鳴遙はその能力が強力な分、魔法に関しての能力値がかなり低い。魔力値はB以上は上がらないだろう。そう行方は予測している。使える魔法も少ない。例え行方が干渉したとしても、そこまで変わることはないと考えている。

「もつとも、魔法だけが弱点じゃないけどな

『と、言うと?』

「製造時間も必要だし、スキルによつては環境や時間、題名や条件などが必要になつてくるしな」

全能な能力、と言つわけではないのだ。

「オレがアイツを勧誘する理由は、そんな強力な能力を持つているからだよ」

『まあ、確かに彼女の能力は凄いですが……』

「そう。確かに一つの能力は凄い。凄いからこそ オレは警戒する

『…………』

「まるで、核爆弾かのようなほどの存在だろ? アイツ

能力が目当てで彼女を欲しているのではない。

彼女が爆弾のようなほど、何が起こるかわからない存在だから監視

下に置こうとしているのだ。

馬鹿な人間に取られたり、嵌められたりして強力な能力を渡してしまう危険性だつてあるのだ。

『ですが、遙さんは至つて理知的です。彼女がそつそつ騙されることは無いと思うんですけど?』

「洗脳とかあるんだぜ?」

『その時はマスターが解けば良いのでは?』

「隨時オレが近くに居るわけでもないし、そもそもオレを含めた転生者達は全員　『万華鏡写輪眼』の【神魂命】^{カミムスビ}によつて強力な幻術を掛けられているしな」

『.....』

とある転生者が持つ瞳術【神魂命】^{カミムスビ}の前では転生者であろうが、最高であろうが、最強であろうが.....誰にも勝つことが出来ない。

いや、勝つとかそんな話ではない。

「唯一、アイツはオレの敵ではないことは確かだが」

『そうですね。そもそも、原作知識が無い方でしたし』

「前世が前世だ。そもそも【リリカルなのは】^{カミムスビ}すらない無い世界から来たんだから」

さすがの行方も、何が何だかわからなくなるような世界であった。

もつとも、この世界はすでに行方が知っている【魔法少女リリカルなのは】^{カミムスビ}の世界ではない事だけは確かであったが。

『助けて』

「……やつらに限れば、もつ原作開始なのよね。忘れていたわ」

そして、原作が始まる。

あらゆる不安要素を含んで。

六話 彼の原作直前……彼女の能力（後書き）

名前：浮鳴遙（うきなる はるか）

性別：女

魔力：Bランク

能力：想造力

無効脳：スキルを無効化するスキル。作中では行方に使用。

アリバイブロック

脇罪証明：どんな場所にも居ることが出来るスキル。作中では行

方の目の前で使用。

ライアーカット

事実口異：眞実以外の言葉を除外するスキル。作中ではキールに

使用。

七話 彼女は白いウサギ

原作が始まった。

そのことに關して遙は、ただ事實を受け止めただけであった。
考えていることは、出来るだけ巻き込まれないようにして、と言
う逃げの思考であった。

そのための能力。戦闘にあまりにも特化していない能力を神から貰
い、そして転生してきたのだ。

何が第一の人生を手に入れてまで痛い思いをしなくてはいけないん
だ。

二次創作とか出てくるオリ主達の思考が理解できない。

運命を変えて幸せな未来にする？

馬鹿馬鹿しい。中一病ヒーローハンマーはさつさと卒業ハラダする。

結局やつていることは他人を救う事ではなく、自身の自己満足だ。

そんな愚痴を口から漏らさず、内心で吐きながら今後のことを考え
る。

どこにでも行ける、居れる腑罪證明アリバイブロックに、どんな能力でも無力化でき
る無効脛ライフゼロ、あらゆる病氣を操り応用で傷さえも治すライフケースことさえ出来る
一本の病爪、相手の視界と同じ光景を見ることが出来、相手の考え
ていることがわかる欲視力バラサイトシーリング、相手の言つた真実以外を除外できる事ラ
イアーカットラ 実口異。

あらゆる能力を創造し、例え巻き込まれてもすぐに脱せられるよう
手札を用意してきた。

巻き込まれないようにするのも大切だが、巻き込まれた場合どれだ
け早く脱せるかも考えなくてはいけないのだ。

それほど十分に手札を持ち、さあ原作に巻き込まれないよつ今日は早く帰り、コーカーの念話が来ないよつ結界を張つてから一日を終えよ。

そう考へていたのに

「…………

親からお遣いを頼まれ、外に出ていた遙は偶然にも、原作に出ていなかつたジューエルシードを拾つてしまつた。

拾つた瞬間、しまつたと気づき捨てよつかと思つたが、もしかしたらいつか暴走して遙自身が危ない目に遭うかも知れない、と考え明日の朝にでも主人公の机の中に入れておこう、と決めたのだ。

そして、帰宅しようとしていた道で ウサギと出会つた。

「…………」

真つ白い毛並みを持つ真つ赤な瞳のウサギが、彼女の目の前に現れたのだ。

そして彼女の目を数秒ほど見つめたほど、ビコカへ飛び跳ねていつてしまつた。

「こんな街中で、うわわわと会つとは」

原作にはウサギなんて出てこなかつたので、これはリリカルとは関係ないだろうと決め付け帰路に戻つた。しかし、歩いているうちに気がついた。

人が居ない。

「…………」

ウサギと出会つた辺りから人を見かけなくなつた。
もうすぐ夜だが、それでもまだ太陽は橙色である。つまりいつもなら街の人達が居る時間なのだ。
なのに、居ない。

「…………封時結界？」

術者が許可した者や、結界に進入できるもの以外との空間位相をずらす魔法。

それをいつの間にか喰らつっていた。

「…………」

これを行つた人物の候補として行方が頭に浮かんだが、決め付けはしなかつた。

他の転生者が、自分がジュエルシードを手に入れた事を見たのかもしないし、もしかしたらフェイト達が現れたのかもしれない。
前者なら全速力で逃げるが、後者ならジュエルシードを渡してしまおう。

そう考へ、少しの間待つていたのだが……

「…………誰も現れないわね」

異常なほどに静かな世界と化している。

待つのが面倒臭くなつたので、結界の終点を田指して歩き始める。もしかしたら誰かが見張つているかもしれないのに、能力を使用せず歩き始める。

そして数分後。

「駄目ね」

まっすぐ歩いてみたものの、結界の壁にすり当たる事はなかつた。結界を視認することは出来ているが、どうにも辺りつく感じがしない。

遠近法とかそんなものではなく……もつと違うものを感じる。

「…………」

風景に違和感を感じたので、買い物袋から卵を一つ取り出しつて落としてみる。

置いたのではなく落としたので、当然割れた。

それを見届けてから、彼女はまっすぐ歩き始めた。

「…………」

そして数分経つたが、卵が割れた地点に戻つてしまつていた。

「なるほど。そつまつ類のものね

術者は対象者の前に現れず、対象者の精神や体力を消費させていく。そう言う類の術だと考察した。

普通の道ならば【A - B - C】であるが、この術の効果により【A - B - A】となってしまっているのだ。永遠と終わる事のない道筋。

「だけど、私には通じないわ」

自身が持つ脇罪証明^{アリバイブロック}により、結界の中であろうとなんであろうと、どんな場所に行ける。つまり永遠と終わらない空間からもあっせりと抜け出せるのだが

「……あ、あれ？」

脇罪証明^{アリバイブロック}が発動しなかつた。

そのことにより、初めて遙は動搖した。本当の意味で出られなくなってしまったのだ。

「…………」

すでにこれが原作とは関係ないことに気づいている。

しかし、相手がどんな能力を使っているかわからないのだ。

結界と彼女の能力を無力化している能力は、また別物なのであるう事を推測している。

結界の所為で人々が居なくなり、予測であるが……幻術系の力により永遠の道を作られており、そして何かの能力で無力化されている。

「…………」

何故、自分がこんなことに巻き込まれているか考える。

転生者だから？ ジュエルシードを拾ったから？

こんなことなら、行方達と同盟を組んでおけば良かったと後悔する。最高の魔導師を自称する行方なら、少なくとも魔法の腕には自身が

あることが伺えるからである。

「やつれと出できなむことよ。何が目的なのよ」

しうがないので、正々堂々出でてきてもいいとした。
幻術使い相手に正々堂々も無いかもしねないが。

しかし、相手は反応を示してくれた。

「…………」

建物の物陰から白いウサギが出てきた。
一時間ほど前に見かけたウサギだ。

「…………え？」

だが、出てきたのはウサギだけじゃない。
大きな満月が突如現れ、夜となつたのだ。

「ぐすくす」

しかもウサギがありえない笑い方をした。
明らかに、使い魔だ。

「……出来れば、人型の姿になつてくれないかしら
「別に良いけど、きっと貴方、驚くわよ」

ウサギが遙の目を見た瞬間、ウサギの姿が消えてしまった。
そして 背後に気配。

「 初めまして」

背後を振り向く。

そこには、光の加減によつては紫色交じりにも見える白銀の長髪を腰まで伸ばした、赤き瞳を持つ少女が街灯の上に座り込んでいる。服装は女子高生が着る様なもので、ブレザー + ミニスカートである。そして、綺麗な髪の上からウサギの耳が生えている。

その姿を見て、遙は自身がすごい表情で驚愕していることに自覚しながらも、それでも驚かずにはいられなかつた。

「れいせん鈴仙・優曇華院・イナバよ。鈴仙って呼びなさい?」
そして、危険だと思った。

七話 彼女は白いウサギ（後書き）

この小説ではリジエティカ・エイルツスを出すつもりはありません。
いつか出す作品で出すつもりです。

八話 彼女の原作介入

「はあ……はあ……」

遙は屈みながら、乱れた息を整えていた。

髪の毛も乱れていたがそちらに集中がいかず、そのままの状態で移動を始めた。

その代わりにポーネティルのためのゴムを解き、ストレートにする。顔見知りに自身の姿を特定されたくないために家でしか外さないゴムを外したのだ。

「なんなのよ一体……」

すでに結界は解除されており、ウサギの使い魔は目の前から居なくなっていた。

そして、遙が拾ったジュエルシードも、無くなっていた。

言つてしまえば、奪われてしまったのだ。

「…………」

敵は幻術使い。

いつの間にか奪われ、いつの間にか目の前から消えていて、いつの間にか結界が無くなっていた。

彼女が長時間結界を維持してまですぐに奪わなかつた理由はわからない。

推測だが、能力が使えないかどうかの確認をするまで現れるつもりが無かつたのである。

だが、遙が能力による脱出を図ったが失敗したのを視認して、前に現れたのだろう。

そして奪われ結界が解かれた後に、遙は全速力でその場から逃げた。文字通り逃げた。能力とか考えられず、逃げた。

相手は使い魔。

戦闘はもちろん出来るだろうし、幻術を見抜く能力だつて思いつかない。

遙の想像力^{スキンルメイカ}は何の能力でも作れるわけではない。

規定・空間・場合など、色々な規則を以て能力を作ることが出来る。

逆に言つと、条件外のものになると能力を製作できない。

そして、幻術と遙の相性は悪かつた。

ただそれだけのことだ。故に、幻術対策がまったく出来ないのだ。

「あ～あ。嫌になるわね……」

空は本当に暗くなっていた。

幻の夜空ではなく、本当の夜空。

溜息を吐きながら、彼女は家路に戻る。

この時、能力を使って帰らなかつたのが仇となつた。

「……え？」

曲がり角の向こう側で思わず見てしまった光景。

そして、少女と目が合つてしまつた。

高町なのほど、目が合つてしまつた。

「はる、かちやん？」

「」

彼女は金色の毛のフェレットを抱きかかえており、その視線の先には黒い『何か』が存在していた。

最悪だ、と思わず呟いてしまつたが、その声音は『何か』の叫び声によつてかき消されてしまつた。

そして『何か』は飛び跳ね、なのはを踏み潰そうとする。

「ちつ……一

しかし遙がすぐさま彼女の体を抱きかかえ、すぐに脇罪証明を行い少し離れた場所に移動した。

その現象になのはとフェレットは驚いていたが、遙はなのはを降ろし、

「驚いていないで。今はこの状況をどうするかだけ考えて

と言つと、思い出したかのように『何か』を一人と一匹は見た。そして、フェレットが遙を見つめ質問してきた。

「貴方は魔導師ですか？」

「……一応ね」

「でしたら、これを使ってアレを封印してください」

フェレットはどこから取り出したのか、赤い宝石を見せてきた。それをほんの少し見つめた後、

「無理ね」

あつやつと否定した。

「え……」

「私は半人前どころか三流よりもとしたのレベルよ。それも戦闘向きじやないし、才能も無いわ」

「で、でも……」

「むしろ、彼女の方が適材じやないのかしら?..」

遥がなのはを見ると、それを応用にフュレットもなのはを見た。いきなり自分が上げられた事に少し驚いた。

「え……私!?」

「そうよ。見たところ、私以上の魔力量あるし」

「ど、どのくらい……?」

「私が十円だとしたら、貴方は五百五十円ほどの価値はあるわ

「ど、どのくらいかわかり辛いかも……」

「あ、あの……その方は魔法とは……」

「関係ないわね」

『ユーノ様』

と、そこで赤い宝石が反応した。

「わ、しゃべった」

『そこ』の遥様よりも、彼女との方が適合率が高いと思われます』
『れ、レイジングハートまで……』

フェレット……もとい、ユーノは赤い宝石の発言に表情を険しくしながらもどうするか考えていた瞬間

デバイス

「なのは、平氣か！」

上空から大量の魔力弾が降ってきて、『何か』に攻撃していく。銀色の光を放つ、火の弾や風の弾、水の弾や氷の弾に雷の弾である。そして現れたのは 中島貴樹である。

「貴樹君！？」

「えつと……彼は誰でしょうか？」

「クラスメイトよ。もつとも、彼も高ランク魔力量の魔導師だけど」
その言葉に驚くユーノ。
この世界は魔法技術が無い世界のはずだ、と考えるが今はそれよりも、

「なのは！ 悪いが俺は封印魔法を持つていらないんだ。だからお前がアイツを封印してくれないか！？」

「わ、私が……？」

「ああ！」

勝手に進んでいくが、遙は気にしない。
後はテンプレ通りに終わるであろうと思つたからだ。

その後、なのはは貴樹に頼られたためか、嬉しそうにレイジングハートを起動させ、そして『何か』を封印した。
そのままじきにユーノは呆然としていたが、遙自身は今後何を話せば良いのか、内容を考え始めていた。

中島貴樹が介入する事を前提として、自分がどうすれば原作にこれ以上介入関わらないように出来るか、頭の中で構築し始める。

八話 彼女の原作介入（後書き）

今日は雑でした。あと、~~が~~ががが。
実はと云うと、今日は投稿するつもりがありませんでしたが……
応思い浮かんだので投稿。結果、雑になってしましました。

すみません。

P・S

作者はポニー・テイル萌えです。
異論は認める。

九話 以上／異常、終了。以下／異化、始めよう。

中島貴樹　彼は転生者である。

魔力値SSSランクで、フレメンタルハンド五属制御の稀少技能を持つ魔導師。

しかも『ニコポ』と『撫でポ』も貰い、転生してきた転生者である。

そんな彼は原作が開始するまで我流で魔法の腕を鍛えていた。

そしてそらなりに強い魔導師となつた頃に原作が始まり、高町なのは元に向かつた。

そこで黒い『何か』を魔力攻撃を行い、なのはを魔導師として覚醒させ、封印させた。

そこで、気づいた。

浮鳴遙……クラスメイトで、月村すずかの隣席の少女。

クラスで唯一、彼に好意を抱いていない少女である。

そんな彼女がユーノ近くに存在していたのだ。

「アーツも転生者だつたのか……」

面倒臭そうな表情をしている遙を見ながら呟いた。

公園。

あの場に居たらまずい、と言つことで移動したのだ。

そこには当然、遙も居た。

そして魔法やジュエルシードのことを聞き、なのほと貴樹は参加する胸をコートに伝えた。

しかし、遙は

「私はバス」

参加しようとした。

「え……でも、ジュエルシードのものは危ないんでしょう？ だつたら、回収しなくちゃいけないんじゃ……」

「そうね。だけど、さつきも言つたとおり私には魔導師としての才能は無いし、足手纏いになるだけじゃない。落ちこぼれも良いところだわ」

自虐的な言い方ではなく、ただ事務的な言い方をしていた。

「それに、適材適所で言つ葉があるでしょう？ 全然適材じやないわ」

「…………」

その間、貴樹はずつと考えていた。

この女、何が目的だと。

しかし、遙の目的はあつそりとしていたものだった。

「簡単に言つちやうと、私は関わりたくないの。そういうのは……時空管理局だつて？ その組織にわつまと連絡して回収してもいいづべきよ。そういう危ない事、専門家に任せらるべきですよ」

右手の甲を見せるかのように上げた瞬間、爪が一気に伸びた。

「え……」

「とつあえず、その傷は治しておくれ」

五本の病爪ファイブフォーカスによつてユーノの怪我を治す。

その能力に驚いている三人に遙は背を向け、

「私の介入劇は、ここで終わりよ。以上ノ異常、終了」

去つていった。

ちゃんと買い物袋を持つて。

「甘く見ていたわ……」

帰路に戻りながら、遙は呻いた。

「原作介入をちょっとでもしちゃうなんて……」

自分の行動を反省しながら空を見つめた。

思えば、このお遣いを頼まれた時点で間違いだつた。

頼まれた時、必死に拒否すれば自分は介入しなかつたのでは? と考える。

そうすれば、ジュエルシードを拾わずウサギの使い魔とも出会わなかつたのでは……。

「……あ。彼等こうひがの事ぐらに言つておけば良かつたかも」

ま、別に良いか。

そう結論に達し、遙は家に戻った。

その後、かなり叱られたが。

翌日。

遙は親に長い時間説教を受け、少し寝不足気味であった。

浮鳴家の家は学校に近いので歩きで登校しているため、原作主人公達が乗車しているバスには乗っていない。そのため鉢合わせる事はないが、今日と言う今日は面倒臭く感じた。

遙が欠伸をしていたところ、背後から……

「おはよう。浮鳴先輩」

「……ああ、キール。おはよう」

キールが挨拶してきた。

長い銀髪の少女はニヒルな笑みを浮べながら、接してきた。

「まったく……先輩が原作に関わらない詐欺を行うとは思わなかつたよ。なんだい、バニングス先輩に習つてツンデレでも始めたのかい？」

「つるさいわね。私だって、関わりたくなかつたわよ

某金髪の少女がバスの中で誰がツンデレよ……と叫んでいたらしが、遙は知らない。

「クツクツク……いや、失礼。確かに浮鳴先輩からは原作に関わりたくない意志はしっかりと感じられる。だが、少し油断しすぎなのでは？」

「……まあ、私もそれくらいはわかっているわ」

自分でも失敗した、と自覚していた。

改めて他人から言わるとさらに自覚させられる。

「……と言うより、何で貴方は知っているのよ」

「僕は感知系能力者なんだよ。行方先輩も知っていると思うよ？」

先輩が介入してしまった事を監視魔法^{サーチャ}辺りで

「……」

そもそも、遙の実力は行方の能力で知られてしまっているが、遙はと言うと二人の実力を知らないわけだ。正直、キールの方はと言うとまったく未知数なのだ。

恐ろしい事に。

「一つだけ、質問させてもらひつ」

「何かしら」

「何で原作に対する防衛なんて練っているの？」

一瞬、何を言われたのか理解出来なかつた。

「現実的な暴力沙汰から逃亡するための防衛能力は理解できるけど、原作を介入しないための力とか……意味が分からないな」

「…………」

「よく言うだろ？ 幽霊は怖がっている子の元へ現れるって。つま

リアレだよ。君は原作を意識しすぎたから原作介入しちゃったんだよ。数々の一次創作でも原作に介入しないと言つた転生者達も、最後の最後にはちゃっかり介入してたりするだろ。結局は、心のどこかで原作を意識しているから介入しちゃうんだよ。その意識を、無くさない限り、君はまた介入しちゃうよ」

「…………

確かに、その通りかもしれない。

介入したくないとかほざいていたくせに、かなり原作の事を考えていた。

好きの反対は嫌いではない。無関心だ。

「……そうね。少し考えを改めてみようかしら」

「うん。それが良いと思つよ」

肉体年齢では一歳年下のキールであるが、かなり大人っぽい。確かに転生者の中身の年齢は見た目とは一致しないものだが、それでも年上と言う感じをさせる。

「……ねえ、キール。貴方の前世って　」

「ストップです。浮鳴先輩」

前世のことを聞こうとした瞬間、遮られた。

禁忌だったか？　と思いキールを見てみると……キールは遙ではなく、前を見ている。

彼女達はすでに学校の門を過ぎている。つまり、彼女達の前にあるのは校舎だけなのだ。

だが、キールは校舎より少し前の位置の場所を見ていた。

そこには一人の少年が立っていた。

遙と同年齢であることが伺える背丈。

顔は平凡そうな、どこにでも居そうな顔だ。

黒髪黒目。服装は普通の服屋で買えそうな服を着ていた。

それでも遙の目には、普通と言つ印象が浮かばなかつた。

「初めまして、ボクと同じ転生者のお一人さん」

彼は挨拶をしてきた。

それと同時に封時結界を張つた。

自身の力で張るタイプではなく、既に用意しておいた物を発動する借り物タイプの結界だつた。

「転生者つてことは、それなりに強いんだろう？」

戦闘狂……否。

「つまり、殺しがいがあるつてことだ」

戦闘凶。

ナイフを逆手で持ち、上に掲げ宣言した。

まるで主演として開始の合図をするかのよう、「ん」と言つた。

「これより、零崎狂識による零崎を

以下ノ異化、始めよつ

殺人宣言を。

九話 以上／異常、終了。以下／異化、始めよう。（後書き）

超展開。

原作に関わらないと誓つた瞬間、殺しの宣言がきました。おいおい
……。

本当はユーノ君達との会話を多くするつもりでした。
使用した能力の説明だとか……しかし書き下ろすのが書いている途
中で難しく感じたので、断念し投稿。

遙の以上／異常、終了。

これは魔法との関わりを異常で終えると言つ意味と、魔法と言つ異
常への介入を終える、と言つ宣言。

狂識の宣言は逆になります。

以下はこれから先。異化は非道的な世界に成る。
そいつ言つ意味ですね。

次回は戦闘になるかもしません。
それでは、この辺で。

九・五話 彼女はウサギで使い魔（前書き）

無印辺りでは原作をマジで回避する物語だからリリカル成分がかなり足りない……。なので、今回は他のキャラで話を書きました！時間軸で言えば、遙達が戦闘した日の放課後です。

次回は遙の話です。

九・五話 彼女はウサギで使い魔

ウサギの耳を生やしている少女、鈴仙・優曇華院・イナバ。利き腕である右手の中指には紫色の宝石が嵌つていて、人差し指には藍色の宝石が嵌つていて、指輪を嵌めている。

彼女の身長は小学三年生ぐらいであり、それは主の消費する魔力を節約するために小さい姿をしている。主が同じくらいの背をしているから、とも言えるが。

「……駄目ね。この辺りにはジュエルシードが無いわ」

主と違い、魔法が優れている鈴仙は魔法的手段でジュエルシードを探知してみたが見つけられなかつた。彼女の『瞳』を使えば見つけられなくも無いが、主と違つて『瞳』を使えば大量に魔力を消費する事になる。故に一般的な魔導師と同じ方法で探査している。

「今現在、ジュエルシードは一個。あの転生者から奪つた物だけとは……」

原作を知つていればあっさりとジュエルシードを手に入れられるだろうが、生憎主は原作を知らない。

否、【魔法少女リリカルなのは】などと言つ創作物が無い世界から転生してきたのだ。

知る事などできない。

「 ん。魔力反応」

突如神社周辺に出現した魔力に少々驚きながらも、彼女は呟き確認する。

幻術魔法により姿を隠しながら、ジュエルシードの魔力反応がした元へ飛んでいく。

鈴仙が向かつた先の神社には大きな犬がいた。

さしづめ、ジュエルシードと融合したのであろうと推測した。

封時結界を開け、手を銃の形にする。

「バンツ」

中指に嵌っている指輪が紫色の光を放ちながら、指先から銃弾型の魔力弾を一発放つ。

すると魔力弾が途中で増殖し、一から百に増えた。

その光景に驚いて動けないでいる犬に全て当たり、あっさりと戦闘不能になった。

（女だけど）ガンマンみたいに（指先だけど）銃口に息を吹いてから近づき、ジュエルシードを封印した。

「それじゃ、次に行く

「あ、あの！」

次のジュエルシードを探しに行く準備をしていると、声を掛けられた。

未だに結界を開けているため、許可した者以外は入れないはず。

侵入者れいがいを覗いて。

振り向く。

そこには彼女の主と同じ学校の制服を着た少年と少女、そして使い

魔であるうフェレットが居た。

このメンバーぐらいは知っている。原作の主人公達だ。

「あつちやー。少し遅かったか……」

転移使つてでも早く来るべきだつた、と反省していたら、気づいた。男子の方が鈴仙の姿を視界に捉え、驚いている。

「な、何でお前が……」

「それは当然、私もジュエルシードを狙つてゐるからよ」

「そうじやない！ 何で優曇華がここ居 」

居るんだよ。

そう言おうとした瞬間 殺氣が鈴仙から溢れ出た。

思わず口を閉ざしてしまつほど。

「何で私の名前を知つてゐるかとか聞きたいのは山々だけど……でも、これだけは言わせてもらつわ。私の事を師匠以外が優曇華と呼ぶ事を、私は非常に嫌つてゐるわ。だから、鈴仙つて呼びなさい。
鈴仙・優曇華院・イナバ……の、鈴仙」

何故彼が彼女の名前を知つてゐるか心当たりがあつたが、敢えて言わず、主張するかのように……そしてなのはとユーノに自己紹介するように、言つた。

「師匠……そいつの名前は八意永琳やうじえいりんって名前か？」

「…………誰？」

初めて聞く名前に、鈴仙は首を傾げた。

「違うのか？」

「違うわ。私の師匠兼主人は……そうね。『**狗**』^{いぬ}とでも称させても
らうわ」

「**狗**？」

幻想卿関連で**狗**……犬と言えば、と考えている間、

「ねえ、ユーノ君。あの娘の頭からウサギさんの耳が生えているん
だけど……ユーノ君みたいにしゃべられるみたいだけど」

「……あのね、なのは。僕は一応人間なんだよ？ 今は変身魔法で
この姿になっているけど」

「ええっ！？ そうなの！？」

「そうだよ。……あの使い魔のことだよね？」

「使い魔……？」

「そうだよ。動物を依り代とした魔法生命体のことだよ。主と契約
をして、そして主から魔力を常に供給してもらいつ事によつて魔法を
発動できるようになつたりするんだ」「

「へえ……」

「高性能の使い魔を生み出す場合、その消費魔力の量は凄まじい。
だけどその分、一般の魔導師よりも上をいく使い魔も居たりするん
だ」

「じゃあユーノ君。あの鈴仙ちゃんつて、どのくらいすここの？」

鈴仙の方をまつすぐなのはは見て、ユーノに聞いた。
ユーノもつられてるように鈴仙を見て、

「多分……ぐぐらいだと思つ」

重い調子で言つた。

「なつー？ Sランクだとー？」

「えっと……ユーノ君。昨日、遥かやんもBとかAとか言つていたけど……どう言つ意味なの？」

「ランク、と言つのは魔導師ランクのこと。つまり魔導師の実力レベルを」

ユーノは鈴仙がこの時間、襲つてこない事を疑問に思いながらも話を続ける。

「昨日の彼女が言つたのは魔力量のこと。つまり魔導師ランクとはまた違う物だけど……彼女が言つたとおり、なのははAAAランク。つまり彼女は　なのはの三段階ほど上の実力持ちつてことだよ」

「…………」

ユーノが、なのはが五百五十円ぐらいだとすると、彼女は千円ぐらいだね、と苦笑いしながら言つ。

しかし、その圧倒的実力差になのはは絶句してしまつ。

思わず驚きながらも、なのはは隣の貴樹を見る。

強い彼なら　そう思いながら見たが、彼は首を横に振つた。

「…………」

“この”中島貴樹はそれなりに頭が良い。

そしてユーノが言つた通り相手がSランクならば……勝てるはずがない、と考えた。

魔力値がS S Sランクと言えど、それが^{イコール}で実力になることではないことがくらい知つている。

そして何より

「何で霧と雲のマーレリング指に嵌めているんだよ……」

彼女の右手に嵌っているリングを見つめ、溜息を吐いた。

『幻想卿』+『REBORN!』が合わさっているのだ。能力が未知数なんてもんじやない。

「私の実力を考察しているところ悪いけど、私はそろそろ帰らせてもらうわ」

「え？」

「確かに貴方達もジュエルシードを狙っているようだし、持つているみたいだけど……そこな魔導師三人と戦つてまで奪うつもりは無いわ」

さすがに面倒だしね、と呟き 転移魔法を展開した。

「なつ、移動魔法！？ 彼女は逃げるつもりだ！」

「逃げるとか言わないでよ。お互い、やることは戦闘じゃなくジュエルシードの回収なんだし」

「で、でも！ それはユーノ君の何だよー！」

「…………」

なのはが会話に介入してきたので、そちらを見た。

赤い瞳がなのはの姿を捉えた。

真剣な表情をして 瞳に、黒色の勾玉模様を浮かばせて。

「え……何？」

「つうん。別に。ただごめんなさいけど、私の師匠も必要としている物だから 謙れないのよ」

そう言って、転移魔法を発動した。

鈴仙が居なくなつた事により、自動的に結界は消えた。

九・五話 彼女はウサギで使い魔（後書き）

まあわかるでしょうけど、この作品に出てきている鈴仙は【東方】に出ている本物の鈴仙とは違います。幻術とか使いますけど。単なる魔改造されたウサギの使い魔です。姿形口調声が似ているだけ。

十話 彼は凶器／狂氣（前書き）

【零崎】

人を快樂だとか悦楽だとか、そう言つた理由で殺すわけではない殺人鬼。

ただ殺したいから殺す、殺人鬼。そこに理由は無く、無意味にただ殺す存在。

作品・戯言シリーズ・零崎シリーズ、に登場

十話 彼は凶器／狂氣

零崎狂識　名前からして、殺人鬼であるうつ少年。

「零崎……ねえ」

「……なるほど。彼は僕達と同じ“前世持ち”か

「……？前世の記憶なら転生者は全員持っているはずでしょ？」

転生者……簡単に言いつて死んで転生した者。

多く存在する二次創作では、必ずと言つて良いほど神がその転生に絡む。

そして神が関わらずとも、転生者は前世の記憶を保持しながら次の人生が始まる、と言う物語が多い。
遙もその類である。

「ん～……ちょっと違つんだよ。普通の転生者と“前世持ち”的転生者は」

「……後で教えなさいよ」

「了解」

いつもより真剣な表情をしながら、しかしそれでも笑みを消さないキールを見据えて、目の前の少年を見る。

手には数字が刻まれた、よく切れそうなナイフが一本。それしかないのに、圧倒的凶悪さがこの場を支配している。

「え、嘘……」

「どうしたんだい？　浮鳴先輩」

「あのナイフ……E C D E I V A I D A — ?」

数字が刻まれている武器 【一魔法少女リリカルなのは《このせかい》】ではE.C.ティバイダーと言う物が大体は当てはまる。この時代ではまだ出てきていない武器であるが、神からもらったのであれば、納得が出来る。

「あ、もう見抜いたやつだ？『ご名答！』僕が神様に頼んだ改造E.C.ウイルスによって強化された肉体と武装なんだぜ！」

自慢と言つよりも、世間話するような口調で言つてきた。つまり調子に乗つた転生者ではないと言つことだ。

「……どうしようか。魔法が効かないだらうし……逃げる？」
「無理だね」

あっさりとキールは言つたが、遙自身もそれに関しては頭に浮かんでいた。

「まあ、そうよね。アイツが零崎さわじさきを名乗るつてことは、最終的に人を殺せねば良いんだし」

校舎を見つめながら、遙は呟く。

ここで一人して逃げれば遙とキールは無事であろう。だが、学校にいる生徒や教師の命は保障しかねない。こんな殺人鬼を誰が保障してくれるもんか。

(何か方法ある?)

相手に作戦を聞かれない様に念話に切り替えた。

(簡単な話さ。僕達とは戦つてはいけない、と戦意喪失させてゼン)
かへ撤退させてしまえば良いのさ)

(……どうやって?)

(君には『五本の病爪』があるじゃないか)

あらゆる病気を操るスキル 五本の病爪。

(……でも、これは病気を操るんであって、ウイルスを操るものじゃ
ないわよ?)

(そうだね。でも、ウイルスを死滅させる病気も作れるんじゃ
ないかな?)

「……」

その発想は無かつた、と思つたが、

(私、あのウイルスの成分知らないわよ?)

(僕が知つている。このデバイスに載つてているから、それを見ながら
調整してみて)

(時間が少し掛かるけど……)

腕輪を外してこちらに渡してくる。

渡してもらつて、デバイスだと気がついた。

「僕のデバイスの“テール”さ」

「テール……? これ、インテリジェント?」

「元、ね……」

笑いながらも、少し悲壮感を含ませた笑みを浮べた。
そのことに首を傾げながらもデータ採取を始める。

「さて、殺人鬼君。僕が相手にならう」「へえ。それじゃ、相手になつてもらおうか」

「さて、どうしようか……」

キールは冷静にE.C.ウイルスの事を考え始める。
未来の技術では感染者との対戦方法が編み出されているが、この時代にはまだ存在していない。
つまり対策が無い 普通ならば。

「まあ、転生者ほくたちには関係ないけどね」

ポケットから小銭を取り出す。

狂識がナイフを刺すつもりで突っ込んでくるが

「戦闘能力があるとしても、戦闘技術はまだまだよ

電撃を浴びせた銀貨を相手に向かつて撃つ。

それは科学的計算方法により 超電磁砲レールガンとなる。

「…………！」

いち早く攻撃に気づいた狂識は右に避けたが、左腕が吹っ飛ばされた。

それを見届けた後、すぐに距離を置き、腕を再生させる。

「すでに病化しているのか……」

「……ふむ。君の能力は御坂美琴の能力かな？」

どちらとも相手の能力を分析し始める。
情報とは、相手を打ち負かす弱点にもなるからである。

「なるほど。確かに超能力ならE Cウイルスの対魔なんて関係ない
しね」

「お生憎だけど、これは超能力じゃないよ」

肩をすくめながらキールは言つ。

そして“くい”と指を動かした瞬間 狂識の四肢が全て落ちた。

「……へ？」

「さあ、どうする殺人鬼。凶器は地面に落ちたがどうやって人を殺
すんだい？ もしかして、刃に掛けて歯で僕を殺そうとするつもり
かい？」

キールの言葉を聞きながらも、周りをしつかりと狂識は見た。
そして細い光を見つけ、

「……まさかこの世界に曲絃師が居るとは思わなかつたよ
「単なる糸使いだよ」

驚嘆した。

彼は前世の世界に存在した『病蜘蛛』^{シグザグ}の技術ほどでもないが、かなりの糸使いの技術をこの魔法の世界で見ることになるとは思わなかつたらしい。

「まあ、これでも元时空管理局元帥だ。それなりには強いよ

シニカルな笑みを浮べながら、キールは言った。

十話 彼は凶器／狂氣（後書き）

【E.C.ウイルス^{エクリプス}】

人工的に生み出されたウイルス。感染者には強力な破壊衝動と殺人衝動が襲い掛かる。その代わり、身体を兵器化とする。ウイルスの侵蝕が進めば進むほど、超人的な能力を得ていく。

例：肉体再生・肉体硬化・肉体弾力化など

【E.C.デイバイダー】

感染者専用の武装。

これを発動した瞬間から肉体再生以上の能力が発揮され、さらには完全に魔法が効かなくなる。物によって違うし、デバイスのように変形も出来るようだ。

しかしデバイスと違い、明らかに質量兵器に分類される。

質問ですが、『週間ユニークアクセスが多い順』つていつを基準に変更されるのでしょうか？

十一話 彼の予約と条約

「…………」

遙はキールの戦いを見て、聞いて、驚愕する。
超電磁砲レールガン撃つた癖に、御坂美琴の能力じゃないと言うのににも驚いた。
しかし、元時空管理局元帥と言った言葉の方が驚いた。

“前世持ち”

これがキーワードになるのだと、遙は考えていた。

普通の転生者とは違う転生者……キール。

「てへ言つよつ、普通に勝てるんじやなかしら……？」

すでに相手は戦闘不能と言つて良いほどの状態である。
異常なまでの戦闘の能力・思考・方法を誇るキールの前に、魔導殺
しを備えた殺人鬼であろうと倒れてしまつ。

「…………」

もう少し、深く考えたほうが良さそうだと思います。

彼方行方に、キール・ローレライ。

さらに目の前の殺人鬼の名字を名乗る少年。

この世界は、単なる転生者が複数居る世界ではないらしい。

『ソリッドポイント
立体視点』

一定範囲内なら三次元的に細かい場所まで見ることが出来る能力。
距離はと言つと、ミッドチルダの都市クラナガン全域を見渡せるほど。

「……あちゃー。行方先輩、やっぱ居ないや」

いつもなら既に現れているはずの彼方行方が、まだ登場していないのに疑問を抱いたのだが……海鳴市全域を見たが、彼は存在していなかつた。

確かに、やり方次第ではキールでも田の前に居る殺人鬼をどうにかすることが可能だ。

ただし、殺す事を前提とした手段だが。

「どうしようかねえ」

だが、彼には予約が居るのだ。
行方やキール以外ならともかく、行方やキールが殺人鬼を殺してはいけない。

そう言つ、予約であり条約なのだ。

それと

「……」

超面倒臭そうな気配が、学校に近づいてきているのだ。

ソリッドポイント
立体視点で原因を見つけたが、背筋が凍るような思いをした。

さつさとこの戦闘を終え、教室に逃げ出したいほどの存在である。

「ああ、殺人貴君。どうするんだい？」

出来ればさつさと逃げ出して欲しいんだけど、と言つ本心を露しながら聞く。

狂識は四肢を再生させながら、考える。

「……そうだね。もうちょっと腹をやれりうよ」

ナイフを拾い自分に突き刺す。
リアクトだ、と遙は気づいたが、

「……あれ？」

「残念ながら、リアクトは出来ないよ。小細工をすこしあせてもうつているよ」

リアクトが発動せず、ECHOウイルスの真価が發揮できない。
何故か。

「……うーん。ちょっと、面白くない展開だな」

「そうかい？ なら、さつさとどこかに行つてほしいんだけど。」

「そろそろ浮鳴先輩も、君のECHOウイルスを死滅させる病気を製作し終えた頃だらう」

「ちょ」

いきなり自身の名前を出されて間抜けな声を遙は出してしまった。
しかも酷いネタバレだ。作戦内容を敵に言つてしまつたのである。

(今回の目標は、目の前の零崎狂識をここから居なくせることだ。つまり、戦意喪失してどこかに行つてもうれば良いんだよ)

(……じゃ、つまり、私の事を言って、これ以上戦うのは危険だと知らせたわけかしら)

(やうやくひとだよ)

念話で次の作戦内容を伝えた後、キールは狂識を見据える。

「ああ、どうするんだい？」

「……なるほど。確かに彼女は脅威的な存在らしい。どういった能力かは知らないけど つまり、殺せば良いんだよね？」

最悪な展開になった。

むしろこれから狙われる原因を作つてしまつた。暗殺されるかもしれないのだ。

「ど、どうするのよキール！」

「……しうがない。少し本気を出して彼を止めるしか

「 は？」

いつの間にか、狂識の体中には大量の『鍵』が刺さっていた。
一般的な銀色の鍵に、自動車の鍵に、門に使われるような鍵に、バ
チカン市国の国章に使われている『天国の鍵』と呼ばれている物と
同じ形の鍵。

ありとあらゆる鍵が、狂識の体に刺さっていた。

「ぐつ、がはつ」

喉にまで刺さっていたため、引き抜いた際に口から血を吐いてしまつた。

そして喉が再生したのを確認してから、校長の銅像の上に座つてゐる少年を睨む。

そこには聖祥小学校の服を着ている、白髪しらかみに黒目くろめの少年が居た。顔立ちは整つてゐる方であるが、何故かずっと見ていられないほど、『何か』を彼からは感じる。

手元には鍵が存在しており、それを見せびらかすように空中に上げて掴む、と言う動作を繰り返していた。

彼は笑みを浮べながら、

「やめて欲しいんだけど」

と、言つた。

「……何が？」

「いやいや、俺がこれから通う学校の人間達を、アンタは殺そうとしていただろ？ そのくらいの殺意をアンタから感じるぜ」

「……」

一人の少年が話している間、一方キールは驚いていた。

銅像に座つていた少年の気配を察知できなかつたし、今でも感じられない。

それどころか、先程までは姿を立体視点ソリュードポイントで捉えていたのだが、数分前に急に消えて、この場に現れたのだ。

だから、キールは黙つて二人の会話を見届ける事にした。少しでも、情報を得るために。

「まつたく……廃校にする存在は代表的には俺達だろ。他の、しかもこの学校の人間じゃない奴に、廃校にされたくないね」

「……廃校は前提かい？」

「さあね。俺は気まぐれな性格をしているから、何もしないで卒業するかもしれないし。だから、俺から学校を奪うなよ」

「…………」

狂識は自身の体中に刺さっている鍵を一度見たあと、

「ところで、君は一体なんて名前なんだい？」

と、聞いた。

その言葉に嘲笑するような笑みを浮べながら、

「普通、自分から名乗るもんだろ」

と言った。

「ま、俺は心が寛大だからな。そこの人を殺す事しか出来ない鬼と違つて、俺は他人にちゃんと自己紹介が出来る人間。わ〜、すごいすごい、つてね」

「……一ライラつく言葉で言つね」

「さて、それじゃお望みどおり、自己紹介しよう」

狂識の言葉には答えず、先程聞かれた質問を敢えて答え始めた。

「初めてまして、これから私立聖祥大学付属小学校に通う 人類最低で過負荷な男、現実否定主義者の水俣^{マイナス}破白^{みなまたはしら}だ。よろしく頼むな」

異世界。

どこかの世界に、一人の少年が居た。

「悪いな。付き合わせちまって」

「そう思つんだつたら、この幻術を解いて欲しいんだが」

片方は、行方。片方は、藍色の髪持つ少年。

「それで、『狗』。お前はどうするんだ? これから」

「もちろん時空管理局に居る奴らと、零崎狂識に復讐するぞ」

瞳には、黒い勾玉模様を浮かばせながら。

『狗』と呼ばれた彼は、そう言った。

「……じゃあ、一つだけ言つておく。海鳴市に、現在殺人鬼が居る
ぜ」

そして、海鳴市が荒れるような一言を行方は言つた。

十一話 彼の予約と条約（後書き）

今回、遙は空氣でした。

現在の転生者・遙・行方・キール・狂識・破白・中島・？？

合

計、七人

十一話 彼女の同盟加入（前書き）

今更だけど、ちゃんとした内容に成ってしまったので、十一話ぐらいで終わるかも、何て予定は消えた。

今回は短いです。

十一話 彼女の同盟加入

卷之三

-
h?
L

中庭。

そこでお馴染みと化してしまったハンバーで食事を取っていた。

「どうぞお聞かせください。何が？」

行方に向かって遙は質問する。
マイナス

あの過負荷を名乗る少年が現れた後、殺人鬼の少年はどこかへ行つてしまつたのだ。殺人鬼にも、戦つて良い相手かどうか判断できる。そして破白は戦つて良い相手では無い、と結論に達し逃走したのだ。そしてその後、破白が教師の元へ行つたところで、やつと緊張の糸が解れたのだ。

「……別にオレはヒロインがピンチに陥つたら現れる主人公じゃないんだぞ？」

「わかつていいわよ。そんなご都合主義が無い事を」

先輩はどこに居たんだい？

異世界

— 1 —

遙はジト目を、キールは苦笑を行方に向けた。
そして数秒経つた後、遙は溜息を吐いた。

「……本当に、この同盟に入つて良いのかしら
「ん？ 入るのか？」

行方が唐揚げを箸で拾いながら聞いた。

「入るつもりだつたんだけど、ね。ほら、昨日原作開始しちやつた
じゃない？ 私」

「悪い。異世界に行つていたから知らね

「…………」

遙は引き攣りせた笑みを浮べた後、溜息を吐いた。

「まあ、しちやつたのよ、私。だからこの同盟に入れれば何とかなる
んじやないかしら、と思つてね」

「その判断は悪くないね」

遙の言葉を、キールが肯定した。

「正直言つと、僕達の同盟つて言つのは口約束じゃないんだよ」

「…………と言つと？」

「とりあえず、僕達の同盟に入つてくれない限り言えない事だつて
あるし、聞かせられない内容だつてある。これは僕達の意図ではな
く、世界からの制限なんだよ」

「…………」

「だが、僕達の同盟に入ればその制限が無くなるんだよ」

「…………途中で抜けたら？」

「得た分失う」

キールと遙が会話していたところ、行方がいきなり介入してきた。行の方を見ると、エビフライを食べていた。

「…………」

「…………何だよ」

「いえ、別に」

海産系の甲殻類が好きな遙にとって、目の前で淡々とエビフライを食べる行方の行動は理解しがたかった。しかしその感情をグッと抑え、弁当に入っている昨日の残り物の毛蟹の身を口に含む。ふと、遙が行の方を見ると鞄から本を取り出していた。

「それは？」

「契約の書」

行方が本を開くと、そこには契約を記すためのページが備えられていた。

ページの中心だけ四角形に空白が出来ており、その周りは意味不明の文字が大量に書かれている。

その空白の場所に契約内容を記すのだと遙は理解した。

「オレが作った契約書が纏まつた本だ。異世界の古代語を組み合わせた契約^{ギアス}のページだ」

「これに私が同盟に加入すると書かない限り、私は加入できないわけね」

「そう言つことだ」

弁当箱を片付けながら、行方は筆箱を取り出しシャーペンを取り出した。

「……シャーペンで良いの？ 血とかで書くのだと思つていたけど」「確かに術式は古代語で描かれているが、作られた術式は最新のものだぞ？ そう言つた操作は製作者なら簡単に出来るぞ」

実際には簡単じゃないんだけど、とキールは呟きながら自身の弁当箱を片付けていた。

「で、どうする？」

「……加入したメリットを教えてくれないかしら？」

「これだ」

行方が自分の鞄からまた違う本を取り出した。

先程よりも表紙が黒い本である。

「それは？」

「オレが製作した、オレの魔導の一分の一が入つている魔導書だ」

「『孤独の書』だね」

「…………」

夜天の書のような表紙であるが、全然違う事を、受け取つて理解した。

「基盤は夜天の書だが、夜天の書以上の防衛能力だ。と言つたが、攻撃能力の方はそこまで無い」

「…………闇の書とは違うのよね」

「夜天の書の方だから暴走とかは無いぞ」

「でも、私そこまで魔力無いんだけど…」

「『孤独の書』自体に魔力が内包されている。書自体にリンクカードがあり、その中にある魔力が減少する度に増殖するようになつて

いる。だから魔力の心配はしなくて良い、と言つてバイスだ。アルカンシェルを撃たれようと、完全防御してくれるぞ」

「…………」

遙には苦笑いを浮べる」としか出来ない。

「それをやるよ」

「そう。ありがたいわね」

シャーペンを受け取り、遙は『契約の書』のページに自身の名前を書き始めた。

「同盟の名称はあるのかしら?」

「UOJ団」

「またふざけたものを……」

“浮鳴遙はUOJ団に入る事を誓います”と書き、シャーペンを置いた。

すると文字がページに浸透していく……

「これでもう消せないぜ」

「…………恐ろしいわね」

消しゴムを取り出し、消そうとしてみるが、無理であった。

「すでに術式の一部と成っているんだ。他の文字が消えないように消す存在の意味を無力化しているんだよ」

「禁書世界の魔導書みたいな状態ね」

遙は行方の事を、ただ魔法が得意だとしか思つていなかつたが、改

めて実力を教えられた。

文字通り、最高の魔導師なのであるわ、と。

「んじゃ、放課後にお前の家に行って良いか?」「構わないわ。だけど、家の場所分かるかしら?」

「安心したまえ。僕は感知系だと言つただろ?」「

キールの言葉を聞き、何だかストーカーみたいね力ね、と遙は思つてしまつた。

「んじゃ、そん時にこの世界の真実を教えてやるよ」

鞄を持ち、行方は立ち上がつた。

「それじゃあ、放課後にね」

キールもそれに習い、教室へと向かつた
そして残つた遙は……

「……そろそろ次の授業ね」

次の授業の仕度をしに、教室へと戻つた。

『孤独の書』を持っていきながら。

十一話 彼女の同盟加入（後書き）

次回はこの世界について。

急遽書き出した番外編（前書き）

カツプルがイチャイチャする日が今日だと思ひ出し、急遽書き出しました。

時間軸は、中学三年ぐらいです。

急遽書き出した番外編

厚着姿の少年、彼方行方は現在『翠屋』の箱を右手に提げながら、雪が積もっている道を歩いている。

箱の中にはケーキが入っており、一人分のケーキが入っている。行方は器用に箱の中の時間をずらして傷まないようにして、自身には温暖化魔法を発動している。

「……うん。思つた以上に、遙から貰つた手編みマフラーは暖かいな」

数日前にとある少女、浮鳴遙から貰つたことを思い出しながら呟く。首元だけは温暖魔法を使わなくて良いほど暖かい、と行方は感じていた。

雪が降つてゐる。

白く輝く氷の結晶が空から舞つてゐる。

そしてそんな空を見上げながら、彼は呟いた。

「さつやと帰るか」

早足の状態で帰宅した。

「ただいま
「お帰りなさい」

玄関には彼の養父 ではなく、遙が立っていた。

行方の養父は出張が多いので、友人が少ない行方は遙を呼んでいたのだ。

遙の方も友達が少ないわけではないが、だからと言つてグループを作るタイプではないため、クリスマスは暇だったので行方の家に来たのであった。

そして、遙の言葉で行方は先程ケーキを買いに行つていたのだ。自分で。

「しつかし……キールの野郎は予定入つていたか」

「……キールは女の子でしょ？ 野郎つて言つのはおかしくない？」

「気にするな」

行方は箱の中からケーキを取り出し、さらに盛り付ける。さらにコップを取り出し、冷蔵庫からジュースを出して一人分注ぐ。

「今食べるの？ 普通夜なんじやないかしら」

「多めに買つておいた。今食べる用と夜食べるようだ」

「貴方は乙女か」

「腹が減つていたんだよ」

自分と遙の前にケーキが乗つた皿とジュースが入つたコップを置く。

「てか、お前は食べるの？ 食べないんだったらケーキ戻すけど」

「いただくわ」

女の子は甘いものが好きなのよ？ それって本当なのか？
そんな話をしながら一人でケーキを食べていく。

「甘いものが好きと言つと、リンティさんだよな」

「私達は直接会つたことないけど……あれ？ 行方は会つたことがあるんだつけ？」

「前回の人生でな」

行方は自分のイチゴショートケーキの上に乗つてゐる大きなイチゴを、遙の皿に移してやる。

先程食べたそうな表情を少しだけしていつたのを行方は氣づいていたからだ。

「……ねえ」

「ん？」

「後でアーチと一緒に見に行かない？」

「別に良いけど」

行方は今夜のメニューを考えていたところを、いきなり言られたので素つ氣無く返事してしまつた。

しかし遙は彼の性格をそれなりに知つてゐるので、別にそこまで思つたりしなかつた。

「偶には一人つきりださ、ゆつくり歩くのも良いと思わない？」

「ん……そう言えば、転生者とかそつち絡み無しではあんまし話したりしないもんな」

偶には良いかもな、と呟いた後ジュースを飲み干す。

そして遙はチョコケーキを食べている最中、ふと行方が彼女の顔をジッと見ていていたことに気がついた。

「な、何？」

「クリームが付いているだ」

行方は彼女の頬についているチョコクリームを指すべつて、それを遙の口に挿げと突っ込んだ。

「んぐっ」

「……頬を少し紅潮させているが、まさかお前、オレが少女マンガの男の子のよつて自分の口に含むとでも思つたのか？」

そんなテンプレ存在しねえよ、と言つた後に指を濡れ布巾で拭く。

「……女の子の口に指を突つ込む、つてビリツの神経しているのかしら」

「すみませんねえ。」（うとう）、異性感情とか前回の世界で消えてい るもん

「でも、今回の世界では存在しているんじょ？」

唇を少し尖らせながら、上目遣いで遙は行方に言つた。

「まあ、あるけど……そんなに無いぞ？」

「どのくらい？」

「幼稚園生徒同じレベル」

「低つくーー？」

予想外の行方の返答に。思わず驚いてしまつた遙。

「正直、何で自慰とかするのかわからないんだよね。する方法も知らないし、する必要を感じないし」

「よく性欲を発散するためだと、快樂を得るためだと言つたけど

「……」

類を紅潮させながら遙は言つ。

単に恥ずかしいだけなのだが、対する行方は首を傾げながら、

「そもそも、その快樂つて言つのがわからないんだよ」

と発言する。

「……まあ、貴方らしいわね」

「そうか？」

「そ、そうよ。……その分だと、結婚相手とか出来そうにないわね」「恋愛とかしないしな。たまに告白とかされるけど、どうも冷めた感じで受け取つちまうんだよな」

「……初耳なんだけど。その告白、どうしたの？」

「普通に断つたけど」

行方は皿やコップを集め、洗い場に置きに行つた。
その後ろで、遙は行方の返答に苦笑していた。

行方が作つた夕食を食べ終えた後。

「……女の私よりも美味しいなんて」

「言つとくが、前回のオレは独り身で行動していたんだぜ？
ノウズ
解析で奪つた知識を使つた料理技術とかもあるし」

構成
コット

「ちょっと頑張つてみよつかしら……」

そんなことを言いながら、ふと時計を見た。

「そ、そろそろアーチを見に行かない？」

「……ん？ そうだな。ちょうど良い時間だろ」

行方も時計を見て、仕度をし始める。

遙の方もハンガーに掛けておいた上着を着始める。

ふと、行方が首に自作のマフラーを巻いているのを見て、少しニヤニヤしてしまった。

「……その変な笑みは何だ」

「え？ 変な笑み？」

「鏡見て来い」

行方の言葉には従わず、一度後ろを向いた。
そして落ち着いた頃にまた行方の方を見る。

「せ、行きましょ」

「……腕に、腕を巻きつかせるとか凄く歩きづらいんだが」「巻きつかせるとか……もっと良い言い方あるでしょ？」

遙は少し頬を紅潮させながら、遙はそう言った。

「は、早く行きましょう」

「たつく……わかったよ

行方も笑みを浮べながら、そう言った。

「と、言つ夢を見たんだが」「黙れ！」

いつもの中庭で、キールの夢落ち発言に対して遙と行方は叫んだ。

急遽書き出した番外編（後書き）

行方の

「正直、何で自慰とかするのかわからないんだよね。する方法も知らないし、する必要を感じないし」

発言ですが、これは作者の本音を文にしたものですね。
一十四日以内に書い「う」と一十三時から書き始めたのに……数分間に
合わなかつた

orz

十三話 彼等の“前世”（前書き）

今回の最初の方の関しましては、作者も最近になつて気づいた事です。

主に番外編書いている途中で気づきましたが。

今回は説明の話なので、少し ~~アラカル~~ 感があります。

十三話 彼等の“前世”

場所は浮鳴家。

遙は自身の部屋にキールと行方を招き、ジースやらお菓子の袋など、下の階から持ってきてながら、

「座つて」

と言つた。

行方の方はと言つと女の子の部屋は初めてなのか、興味深そうに部屋を見渡していた。

キールはと言うと、本棚に入っている書物のタイトルを見つめていた。

部屋の中央に置かれている大きいとは言えない白い円テーブルの周りに三人は座つた。

ふと、行方は自分の事を遙が見つめている事に気づいた。

少し待つてみると、何も言つてこない。

「…………」

「何だ？」

「いえ、女の子の部屋は初めて？……って聞くつもりだつたけど」「だけど？」

「今更だけど、私や貴方つて上だらうが下だらうが名前で呼び合はないなあ、つて気づいて」

「ふむ」

腕を組んで行方は思い出さうとする。

「確かに、オレは“お前”としか言わないな。……どうする？」ハルハルとでも呼ばうか？

「普通に遙で良いわ。私も行方と呼ぶから」

「それじゃ、僕もそろそろ遙先輩と呼ばせてもらおう」

「構わないわよ。……それにしても、行方って顔に似合はずーックネームとか付けるのね」

基本、行方の表情をは変わらず無表情である。例え笑つたとしても、ほんの少し変わる程度である。

「まあ、感情表現出来なくなつたのは転生してからだしな」「そうなの？」

「まあな。色々合つたし……？」

懐かしむように咳く行方に、遙は少し違和感を感じた。まだ転生してきて九年しか経っていないのだ。なのに、懐かしむ……？

「にしても、これが女子の部屋か……？」

「行方先輩は“前回”も含めて入つた事なかつたのかい？」

「無いね。“前回”はあの三人のためだけに動いていたからな。恋愛どころか異性との交友すら考えていなかつたし

「彼女達も異性なんだがね……」

「オレ、異性だとそこまで関心ないし」

遙が知らないところで、色々合つたらしい会話が始まっていた。行方の話は介入できないので、とりあえず……

「キールの部屋は入つて事ないのかしら？」

部屋のことを話すことになった。

「キールの部屋か？　こいつの部屋は入った事あるけど、正直乙女チックじゃなかつたぞ」

「どんな感じ？」

「『どうぶつ 森』で言つんだつたら、モノクロ系の部屋だつたな

「また懐かしいのを出してきたわね……」

この世界には存在していないゲームを思い出しながら、遙は呟いた。

「ちなみに、行方先輩のは超普通だつたよ。最初入らせてもらつた時は逆にびっくりしたかな？」

「何で？」

「行方先輩のことだからオカルトグッズとか部屋に飾つてあると思つたんだけどね」

クッククック、と特徴的な笑い方をキールはした。

「で、結局どんな感じの部屋だつたのかしら」

「普通の書物が入つた本棚に、勉強机、ベッドだけだつたよ

「普通の書物つて……失礼だな」

遙の質問にキールが答えるが、その回答内容に撫然とした聲音で行方は呟いた。

そして行方はコップにジュースを注ぎ、一気飲みした後、

「……さて、本題に入ろう」

そう言った。

「まず、この世界はよく一次創作とかであるような転生者複数系のリリカルワールドじゃない」

「ええ。それはわかっているわ」

そもそも貴方達が理解不能な存在だし、とかは言わない。

「この世界で重要な言葉は“前世”だ

「前世……」

「そうだ。まず、オレとキールに関してだが……一度このリリカルワールドをすでに体験しているんだよ」

「は？」

行方の言葉が理解出来なかつたので、間抜けな声を出してしまつた。

「簡単に言つとね、遙先輩。僕達は一度死んでリリカルの世界で二度目的人生を送つたんだよ。その上でまた転生して、同じ物語の世界に転生してしまつたんだよ」

「ちょ、ちょっと待つて！」

思わぬ発言に遙がストップを願つた。

「そ、それじゃあ貴方達は三度目の人生つて事！？」

「そう言つことになるね」

「今のところリリカルワールドはオレとキールだけだが」

「リリカルワールド、は？」

遙は、行方の言葉に疑問を覚えた

「その話はまた後だ。……オレとキールだが同じ世界に住んでいたんだが……他にもオレ達が知つてゐる顔の転生者とか存在する」

「中島貴樹　彼も僕達の世界の住人だよ」

「……え？　でも、彼は単なる転生者にしか見えなかつたけど」

「そうだ。つまり、前回の世界の記憶を引き継いでいる奴も居れば、引き継いでいない奴らも居るつてことだ。オレはそう言つた奴を、中島合わせて二人存在してゐることを確認している」

片方は転生者じゃなくて、転生者の養子だけどな、と呟く。

「僕達はこの現象を『リセット』と呼んでいる」

「『リセット』……」

「そうだ。だが、全てが再生されたわけじゃない事もオレ達は確認している」

「……？」

「例えば、オレ。前回の世界では呪いとも呼べる術式に半身が侵蝕され、意識が殆ど無かつた」

「はい？　つまり……」

「魔物と化していたんだよ。だが、この世界では生まれ方は同じだつたのに、その呪い　名称、孤獨^{デュナル}は存在していなかつた」

「例えば、僕。僕は転生者であり、憑依者であるんだが……今回も同じ存在に憑依したんだよ」

しかしキールはと声^{ヒツジ}と、苦笑染みた笑みを浮べながら、

「だけど、今回の世界の彼女　本物のキール・ローレライは茶髪から銀髪に変わっているし、かなり女の子らしい容姿になつていた。」

さらに年齢も違った。前回のキールはティアナ君達と同じ年齢だったのに、今回は高町先輩達の一歳だけ年下と言つ年齢だったしね

いきなり言われた内容に対し、遙は頭の中まとめる。

【彼方行方】

前回：変な魔法にとり憑かれていた。

今回：普通に健康的であった。

【キール・ローレライ】

前回：年齢はティアナと同じ年。容姿は茶髪で中性的であった。

今回：年齢はなのはと同い年。容姿は銀髪で女の子らしいものだった。

「……能力とかも引き継いだの？」

「まあな。……言つとくけど、田を開けたら戻つている、って言つ状態だったから、お前等と違つて神とはオレ達は出会つていないぞ？」

「僕なんて、そう言つた上位種とは出会ふわずに一回も転生したんだぜ」

ちょっと乱暴な口調でキールは言つた。

「……じゃあ、キールが今朝発言していた、元時空管理局元帥つて言つのは」

「やう。前回の話や。僕の稀少技能の立体視点によつ、ミッドチルダの都市クラナガンを見ていたからね。犯罪者だらうが何だらうが、すぐに見つかつたさ。おかげで殉職する少し前ぐらいに名譽元帥の階級をもらつたのさ」

戦闘能力だけが成果に繋がるわけじゃないよ、ヒキールは呟く。

「……ちなみに行方は？」

「影から世界を救っていた。主に馬鹿な転生者どもから「製作エミヤ一万を使つた、アンチ管理局の転生者三十人 + 次元犯罪者大勢との戦は歴史に残つたよね」

キールの発言に、遙は思わず頭をクラクラとさせてしまつた。
エミヤ、つて Fate のエミヤシロウ？ それを一万作つて、大量のアンチ管理局の者達と戦つた？
ふざけている。

「安心しろ。今回の世界ではそんなこと起きないから」

「ま、行方先輩と言う魔物と遙先輩と言う化物、そして僕と言つ偽物が揃つて戦いに出れば、彼等を全滅させることが出来るんじゃないかな？」

「失礼ね」

いきなりの化物発言に、思わず憮然とした発言をしてしまつた。
ふと、行方は思い出したかのように咳いた。

「そう言えば、この世界にもあの偽エミヤは居るんだよな……オレが倒していいってことは存在しているんだよな……まだ確認していなかつたらからアイツが“引継ぎ系”か“可能性系”か解析していない」

「ちょっと、フラグ建てないでもらえるかしら」

不吉な発言に遙は険しい表情を浮かばせた。

……？

「引継ぎ系？ 可能性系？……なんのことかしら？」

「ああ。悪い悪い。説明していなかつたな」

「先程も言つたように、僕や行方先輩は前世から地位や名譽とか以外のほとんどを今回の世界に引き継いでいるって言つたよね？」

「……その転生者が、引継ぎ系？」

「そうだ。そして、中島のように前回は魔法に関する特典しかもつていなかつたはずなのに、今回は『一二コボ』に『撫でボ』を持つているとか、そう言つた前回とは少し違つたりすつ奴等を可能性系と呼んでいる」

「……複雑ね」

「もつとも、遙からして見ればあの厨二病は初見なのだが。

「そつそつ。引継ぎ系と言つのは、僕達以外にも存在するんだよ」「……貴方達以外にも『リセット』に巻き込まれた転生者が居るの？」

「違う」

キールの発言に対し遙が質問したが、行方が否定した。

「前回のリリカルワールドの『リセット』に巻き込まれ引き継いだのはオレ達だけだ。 だが、前世から引き継いでいるのは、オレ達以外にも居るってことだよ」

「……どう言つ意味かしら？」

「つまり、だ」

田を細めながら、行方は発言した。

「零崎狂識は【戯言シリーズ】の世界からの転生者であり、水俣破白は【めだかボックス】の世界からの転生者だ。他にも、【NAR

【H-T-O】の世界からの転生者もオレは知っている。……つまり、だ。
アイツ等は好きなキャラクター達の真似をしているわけじゃなく、
本物なんだよ」

「…………

行方の言つ事は、こうだ。

遙達の前世の世界では物語であつた世界から転生してきた転生者が
居ると言つ事だ。

「特に、零崎狂識の殺人衝動はE Cウイルスから来る物じゃなく、
零崎だから発症するものだ。それと、水俣破白の劣等感は奴自身が
本物の過負荷マイナスだから湧き出る物。正直、この二人はマジでやばいと
オレは思うね」

行方の言葉で、遙は沈黙してしまった。

「まあ、簡単に言つとクロス物の世界だつてことだよ」
「そんな簡単な話かしら」

そしてキールの言葉に、頭を抱えた。

十三話 彼等の“前世”（後書き）

今回のまとめ。

リリカル：行方やキールのように前作からやってきた転生者達 + 。

戯言零崎：狂識は零崎一賊として生きたが死んだ。だけどこの世界に転生した。

めだか箱：^{マイナス}過負荷として生きた破白。しかし『リセット』の影響により死んで、そのまま転生。

鳴門物語：十代目火影の時代からやってきた転生者。名称、現在不明。

破白は『リセット』の影響なので神とかそう言つた存在と出会つていません。

さらに『貫つていた可能性』により、中島貴樹は恋愛系洗脳能力を保持。

キールも何だかんだ言つて、容姿と年齢が違つ可能性により変更。

こんな感じかな？

意外と長くなってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4580z/>

魔法少女リリカルなのは ~転生者によるIFな物語~

2011年12月25日12時54分発行